

第16期第2回 かながわ人権政策推進懇話会 議事録

日時：令和5年8月1日（火）10時00分～12時00分

場所：県庁東庁舎地下1階 B12 会議室

1 議題

(1) 議題 マイクロアグレッションについて

ア 基調講演（オンライン対応）

「マイクロアグレッションについて考える」

講師：中村 正（立命館大学産業社会学部教授）

イ 令和4年度 かながわ人権施策推進指針 取組状況報告について

(2) その他

事務連絡

2 議事録

○事務局

私は神奈川県庁の共生推進本部室長の本間と申します。皆様、本日はお忙しいところ、また会場にいらしていただいた委員の方々、暑い中どうもありがとうございます。人権に関する最近の話題というか、やはり報道機関の人権という言葉を見ないぐらい、ほぼ毎日のように報道されていて、こういった関心の高さなども伺えるところですが、直近で言いますと、国の方の動きとしましては、いわゆるLGBTQの理解増進法が成立したという動きがあります。

また、県内の大きいところで言いますと、例えば相模原市では、差別、人権に関する条例を作ろうといった動きがあるとか、また私どもの話としても、先週はちょうど7年前に津久井やまゆり園事件が起きて、その事件の日が先週の7月26日に当たる日であって追悼式を周りの方と行ったところがございます。あの事件も意思疎通が図れない人は生きる価値がないんだと。そういう価値観というのは、我々はそういう考え方には立脚しないと。障害があってもなくても、あるいは生きづらさを抱えていても、一緒に生きていく、こういった社会を作っていくという思いを、新たにして、これからもやっていくという考えでございます。

そういった中で、本日、有識者の皆様にお集まりいただきまして、人権に関する理解を深めていく機会を設けることができるということは、我々にとっては、非常に貴重な場ととらえております。今日は講師の中村先生に、マイクロアグレッションについて考えるというテーマで、ご講演いただきます。こういった光の当て方から、また我々の考え方もブラッシュアップしていくというような機会になったらいいと思ってございます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

○炭谷座長

本日の懇話会は次第の通り2つの議題について取り上げます。基調講演マイクロアグレッションについて、及び令和4年度かながわ人権施策推進の取組状況報告についてです。基調講演については、神奈川県が最近実施した施策は、被害者の支援に係るものが多く、改めて差別する側の心理や傾向を知り、効果的な啓発や広報について検討するためのテーマとして採用しました。それではまず一つ目の基調講演「マイクロアグレッションについて考える」について、社会病理学や臨床社会学など、専門的に研究されているらっしゃいます、立命館大学産業社会学部教授の中村 正様にお話をいただきたいと思います。

○中村教授

皆さんの関心にどう合うかどうか、心もとないところもありますけれども、お招きいただきましてありがとうございます。私の取組みを中心に話をしたいと思っています。もちろん研究的なことも連日のように加害者たちと色々な対話をしています。それは当然いろいろセッティング、フレームがあります。結構長くやっていたのが奈良の少年刑務所で、性犯罪者の処遇に関わっていました。これは法務省が2006年から取り組んでいる。端的に言えば、それまで何もやってなかったんです。薬物も含めてですけど、再犯者が一定数います。再犯する社会の中も含めて何かをすべきではないかと、ようやく2006年から金沢の矯正教育モデルを使って、性犯罪者処遇が行われていましたので、最初から西日本の拠点刑務所が少年刑務所奈良でしたので、全部話をするわけには参りませんが、虐待する親たちの家族再統合事業、これは虐待防止法という言葉です。その中でも特に家族システム的な見地から言うと男親の暴力の破壊力の方がすごいので、これに対して何らかのアプローチをしておかなければならないと、かねてよりこれも指摘をしていたのですけれども、男親の暴力の中でも、交際相手まで視野に入れますと、大変大きな更正のための面談をしています。

ハラスメント加害者への対応もしています。65歳以上になりますと同じDVでも高齢者虐待という見地になります。ハーグ条約に加盟しましたので、諸外国は全部共同親権なのですけれども、日本はそうになっていないのです。共同親権にすべきかどうかはかなり大論争がありますけれども、暴力が絡んだ場合の離婚後の面会交流のあり方については、これに基づいてやらなければいけないのですけれども、ハーグ条約に一旦加盟しましたので、執行事案研修というのを刑務所から出た後の人たちの更正支援、自立支援、これは地域生活定着支援事業でやっています。そこに関与していたり、以下列挙すればきりが無いぐらいに、加害者臨床と呼んでいますけれども、加害者へのアプローチは隙間に落ち込んでいまして、十分な制度設計ができてない。それから心理臨床家も苦手

とするところが多いです。最近では、裁判所の情状鑑定も頼まれてやるのですけれども、一番最後に書いてあるSNSでのヘイト発言者。処罰的なアプローチだけではなくて、どうしてそういうことをするのだろうかという感じから、二度としないようにするための対応をしています。

そういったことも含めて、あと実践的なことなので、暴力の臨床社会学的研究はもちろんなのですけれど、これをトランスレーショナルリサーチと呼んで、社会実装する。一定の研究がたくさんあるところですので、加害者研究は、諸外国ではかなり蓄積がありますので、これに基づいて、どうしていったらいいのだろうかということで、臨床心理的、個人の問題にしないようにするというのは、人権問題の基本かもしれませんが、臨床社会学と称してやっています。

今日の中身は時間が多分なくなるので、最後は駆け足ですが、マイクロアグレッションについてお話をしてほしいという要請がありました。これは社会的差別、当然具体的な一つの形です。直接的差別がそこで扱われています。日常の相互作用、発話、コミュニケーション、言葉、仕草、記号や物、文脈、認識や知識、文化の中に入り込む差別というふうに考えています。

(資料記載の本ですが) 大学院生がゼミで読んでいて、これは資料上段が明石書店から出してもらった書物です。資料下段が原著の書影です。幸い版を重ねて今7刷りまできています。多く読まれていることになりました。内容はマイクロ、微視的な、ということですね。アグレッションです。日常生活の相互作用で生起する、見えにくい、中には善意も含まれていて、それから何よりも一番大きいのは知らない、無知であることが持つ差別性、暴力性等も考慮、指摘をしています。行動、学校や職場など日常生活の中に現れる偏見差別に基づく見下しや侮辱のこと。マイクロは小さい、些細なという意味では全くありません。個人間、日常生活の中で起こる差別事象のことで、微視的であることゆえの破壊力があるということで、追加しましたけれど、機制と機微(ミクロ)、機制(マクロ)というのはマイクロなメカニズムのことですよ。機微というのは、人肌に入り込む人間関係、コロンビア大学の教職大学院の先生の言葉です。臨床心理学や多文化臨床論を講じるチャイニーズアメリカンのスー先生です。彼が著名な大学の学部長に対する半日のダイバーシティトレーニングセッションから招かれた時のこと、会場に並ぶ学部長や事務長の中に有色人種が1人もいない。しかもほとんどが男性であった。これを環境に埋め込まれたマイクロアグレッションと感じたようです。有色人種の学生であるあなたは、もしかしたら卒業できないかもしれない。もしそういう人がここにいたらということですね。有色人種の教員は正規の職に就いたり昇進したりできないかもしれない。ここではあなたやあなたのような人は歓迎されていない。あなたがもしこの大学にすることにしたら、あなたの成功はたかが知れているというメッセージを、環境を見渡した瞬時に感じたそうです。そうした自分の体験をどのように理論化するというのを、かねてより模索をしてきたということですよ。

多文化臨床ということが、政治的に多様性の国であれば、日本もそうなのですけれども、本来敏感にならなければいけないということもあって、それで書物の中に、マイクロアグレッションという、彼の用語というよりも、1970年代にアメリカの精神科医であるチェスター・ピアースによって初めて使われたと学説史的に紹介してあります。時に公民権運動がピークに達しながら、差別はいけないという機運が強まる中で、より陰湿化する、見えにくくなるというような形の差別が、形を変えて表面化している、あるいはそれを指摘すべきだ、こんなことが背景にあったようです。

それから、この書は心理問題とか、精神科医ですので、内省する、自分の中に取り込んでいってしまう差別ということ、かなり強調しています。そのことを後でご紹介して参ります。

さらに、アジア系の先生であったということもあって、アジア系アメリカ人へのマイクロアグレッションの例がそこに紹介されています。これは本書からです。「よそ者扱いをされる。どこから来たの。英語上手ですね。なぜなまっていないの。善意の評価。」アメリカで生まれたスー先生でさえ、そのように言われる。「アジア系の人には知的能力が高いというふうなステレオタイプがあるようで、知的能力の高さを出自に帰されること。」これも褒められているようですが、意外性をもとに評価されていることになる、ステレオタイプに基づいている。「アジア系アメリカ人の女性がどちらかというところとエキゾチックさを求められることや、男性は性的なアグレッションではないというような、弱々しいものとして見られること。」あるいは「人種間の違いを無意味なものとして扱われている。アジア系はみんなよく似ていると思込んでいる。」それからここはよく感じる場所ですね。「文化的な価値観やコミュニケーションスタイルを問題があるものとして扱われてしまう。」学生に対するネガティブな消極的という意味での蔑み等が出てきます。そうすると今度はアジア系の人たちがそれを内面化していくと、劣等感のようなものが形成される。そういう構造になっています。ここはかなり本書の中でも体系的に批判をされています。ビジネスシーンでもよくあったことがあるということでした。それから「アジア系が無視されていないものとされがちで、人種の問題が大きいところは黒人と白人のことだとされてしまう。」こんな事を体験しながら、本書がしたためられてること、こうした現実がジェンダーとか性的指向とか人種についてたくさんあり、事例が実に豊富にこの書物に出てくる。翻訳したページ数だけで500ページになっています。

ですからより曖昧で漠然として特定したり認識したりすることが難しくなってくる差別と偏見が見えてくる。屈辱的で侮辱的なメッセージを繰り返し伝える。場合によってはそれが善意のかたちをとって迫ってくる。こんなことを、三つの形で表明しています。マイクロアサルトとマイクロインサルトとマイクロインバリデーションと書かれています。

これはかなり積極的な環境に埋め込まれたサインや言語、または行為によって周辺

化された人々に伝えられる人種、ジェンダー、性的指向に対する偏った態度、行為、記号性がそこにある。そういう記号がそこに置かれているばかりで周りは大変脅威に感じる。明示的な軽蔑です。それからマイクロインサルト。これは資料の一番下の赤いところを見てください。「多くは無意識で気づかいないコミュニケーションを通して人種的出自や文化の価値を貶めることになる。女性の医師が、男性の患者から看護師と間違われる。女性の社長に向かって社長はどこ」と聞くなどの例が挙げられています。半ば無意識のようにして私たちが持っている日常の相互作用ですね。こうしたことになっているのがあるので、マイクロインサルトと表明しております。さらに無価値化ですね。「心の動きやマイノリティの人たちの脆弱性を社会的に持つ人たちの心の動きや感情、経験的ナリアリティなどを無視したり否定したり無価値なものとして扱ったりすること。マイノリティの心理状態、考え方、感情、差別経験を排除、否定、無価値化する行為。」自分はジェンダー中立的なので、中立であることに価値があると思い込んでしまっている。現実の格差がそこで見えてこない。アメリカで生まれたアジア系の人に英語うまいですねと声をかけてしまう。そんなこともここに入る。

今のをまとめてマイクロアグレッションの全体像、人種的なマイクロアグレッションのことについて、無意識の善意の無知の気づかないマジョリティの常識となった発言や意識と無意識的行動コミュニケーションとしてまとめてあります。それぞれ三つが体系的に整理をされています。下の囲いの中に発言の例が登場しています。こんなふうに、ジェンダーに関するマイクロアグレッション、性的指向に関するマイクロアグレッション等が、詳細を後でもう少し翻訳していくプロセスで、在日コリアンの院生たちと一緒にアップしてきた経過もあるので、日本の中でどんなふうに考えられるかっていうこともお伝えしますが、その前にマイクロアグレッションが、この懇話会もそうかもしれないかもしれませんが、関心を持たれる社会状況がいくつかあります。これは例えばどういうことかというと、私が内閣府で関わっている仕事の一つですけれども、DV防止法の改正が今年の国会で取り組まれました。それで来年の4月1日からですね、このように変わって参ります赤いところですよ。心身に重大な危害を受ける恐れがある時、心身の心という字が入ったのですね。これやDV防止法ができる時、もう2023年になっていますけれども、20年以上この問題は大きなテーマだったのですけれども、ようやく20年経って、心理的、精神的暴力が、保護命令の発令要件の中に入りました。

さらにその中でも紹介してきたのですけれども、ガスライティングっていう言葉があります。これは説明すると、長いのですけれども、映画の「ガス燈」からきています。マニピュレーション、もう少し操作性が強いもので、相手を精神障害にまで追い込んでいくような、操作性のある人間関係のことです。直近に刑法改正、性犯罪のものがありません。これは2017年2023年と連続して、これまで110年手をつけてこなかった、遅きに逸したっていう感じはしますけれども、遅きに逸した刑法改正があって、さらに強制性交という言葉に変わって、同意、不同意、不同意性交という言葉に変わって参り

ました。この6年に目まぐるしく言葉が変わってきた。その前 110 年何もしていなかったってことと対比すると、矢継ぎ早の成果です。

さらに、今次改正でグルーミング、地位や関係性の利用、時代性問題で議論されていることでもあります。地位や関係性の利用ということが入りました。この地位や関係性の中には、看護者、親も入ります。そういうようなことですよね。あるいはカルト二世問題は主にマインドコントロール、SNSでは大変自己顕示欲的な発言があって、特定の人を名指しして集中放火を浴びせる。そうしたコミュニケーションはなぜ起こっていくのだろうかということを前提に特定された加害的発言をした人への更正の対話を今しています。

それと「いじり」や嘲笑と書きました。これ私の方の院生たちも大変大きなテーマで研究したりして調査をしてきました。「いじめ」ではなくて、「いじり」なんですね。この「いじり」が持つ膨大な人を傷つける要素の中にマイクロアグレッションが入っています。それから自虐的という意味でも「いじり」がよく使われます。笑いを取る中で、人間関係を維持しようとするものの持つ差別性ですよね。そうすると、今度は他方に沈黙を強いていくことになってサイレンシングと私は名付けました。セルフサイレンシングとも呼んでいます。

さらに、DVや虐待が交差する問題が出てきますと、暴力を振るう男性にお前も子供を殴れと、こんなふうに指示されることがあるんですね。現に事件が起こっています。サイレンシング、あるいは、職場での具体的な上司と部下の関係とかですね。それから教祖と信者の関係とかですね。それから体罰ですね、先生のもとでがんばって強くなっていきたいと思う、訴求する被指導者の持つ心理が利用されていくことになる、地位や関係性の利用という中で、この場合は自主的なというふうに表現できますけれども、具体的な対人関係、AさんBさんCさんの二人称的關係の中に、こうしたテーマが懐胎していきますので、マイクロアグレッションの背景に大きな暴力が控えているわけですが、そういうことがあって関心を持たれているのではないかと思います。それでマイクロアグレッションと教育という形で知恵をくださいということで、一緒に訳してきた在日コリアンのメンバーがいつも言われることとして、訳しながら自らの体験を語りました。民族の名前で活動してる在日コリアンたちに対して「留学生ですか。」「日本語うまいですね。」「日本に何年いるんですか。」北朝鮮がミサイルを打つたびに、厳しいまなざしが自分たちに向かう、いろんな体験をしています。

それから最後の方で、謝罪の中にもマイクロアグレッションがある。「あなたを傷つけてしまったならごめんなさい」「気分を害したようなので謝ります」という言い方です。相手を傷つけた自己が立ち現れてこない。加害が内省され、みずからの発言や行為がもつ差別に向き合おうとする謝罪ではない。

ところがマイクロアグレッションは大変大きな問題を持つ暴力・差別と不可分ですので、背景的にはこんな理解もしといた方がいいだろうと思って紹介しております。資

料の右側はアメリカの団体が作った像のピラミッドです。ジェノサイドまで行き着く大きな裾野にバイアス、その上段にステレオタイプ、敵意の表明、配慮を欠いたコメント、排除する言動。今、幾つか紹介してきたようなことについて日本の弁護士さんがそれを翻訳して、さらにわかりやすく書いたものです。偏見、憎悪、暴力。私たちが一緒にマイクロアグレッションを翻訳した時に、同じ明石書店からアンコンシャスバイアスという書物も翻訳されました。この2冊同時に、翻訳されて広げようではないかということで、定着させてきたところです。

あるいは平和の研究者ガルトウングさんが、これは貧困や墮落ということになっていますが、文化的暴力も含めて、体系的に暴力のトライアングルとして考えるべきだということで紹介をしてますので、これも大きな中にマイクロアグレッションが入ってくる。それとマイクロアグレッションが効果を持っていく背景にある非対称な関係性、これ権力勾配と呼んでいます。これは勝手に私が訳したものですけども、さっきのピラミッド様式ですね。男性からのジェンダー認識だと、「ただのジョークだよ何をそんな気にしてるの。」女性から見ると、「あんたの言い方は暴力の文化に加担しているよ。」ジェンダーの問題を体系的にとらえた方がいいんじゃないかということも紹介しておきます。非対称の関係性ですね。女性だから幸せそうな女性を見て、攻撃を加えたフェミサイド的なテーマからずっと上の方に行きますと、硬直したジェンダー役割がそこに入ってきたり、セクシスト的（性差別的）なジョーク、ハラスメント、オンラインや街頭でのハラスメント、侮蔑、ヘイト的スピーチ等、これらは全部連続してるというふうに考えていきます。

さらに同じですけれども、ちょっと下の方見ていきますと、暴力の文化。攻撃や侵入を正当化する個人の信念や考え方、認知システム。認知システムのところにまで私たちの物事の考え方、ここにまで入り込んでいく。プライベートゾーンへの侵入、望まない性的接触。同意、不同意が大きな性犯罪を構成するテーマになっていきますと、同意とは何かってことが、今後議論されていくことになると思います。諸外国では心理的、精神的、あるいは物理的、身体的、言語的暴力と類型化していますが、これでは狭かろうということで、関係コントロール型、coercive control という形で定義を変更しようとしています。関係コントロール型の暴力、現実を定義する力、そしてそこには非対称の関係性があるって、一方、他方の関係で他方が配慮する役割。従っていく役割。追従していく役割。あるいはコントロールされてる役割の中に、社会的な権力勾配が入ってきますので、このことを視野に入れるべきではないかということで、特に親密な関係性、あるいは一定の人間関係を持つようなクラブ、それから信仰のある組織、何か家族類似的な共同性を持つ中に、こうした暴力が宿ってくるんじゃないかということを積極的に取り上げています。幾つかの類型、心理的、精神的、身体的と分けるだけでは物足りなくて、マイクロアグレッションと呼ぼうということになってきています。暴力の中心にあること、イギリスのこれはDV防止法ですけれども、例示されている行動は、経済

的な虐待、脅し、子供を使った脅し、秘密を暴くなどなど、そこに列記したようなことが大変大きな例示として出て参ります。これは日本でもよく見られます。価値剥奪、自己非難や責任を押し付ける、私が悪かったという加害・被害関係を作り出す。これは関係コントロール型なのです。そこには愛情だとか友情だとか、師弟関係だとか、いろいろなパートナーシップがその背景にあるということを指摘しています。ですので、家族の中の親密さを作っていく人間関係の場であるDV問題は、対人暴力の根底に横たわる大きな問題だという形で、エヴァン・スタークさんという社会学者が提唱していますけれども、こうした人たちや心理臨床の現場から上がってくる事例のボトムアップ、これを基に定義が変更されてきています。ヨーロッパでも変更されてきています。日本でも同じで、DVと若干交差する事件が幾つか散見されてきました。これを面前DVと呼んでますが、これは狭いと思います。複合暴力というふうに明確に関係を表現した方がよくて、そこでは子供が独特な内面を作っていく。内閣府で議論をしている、図式化したものをそこにピックアップしてあります。「暴力で問題解決しようとする親たちなんだ。」「強いものが弱いものを支配するのが自然で、弱いことが悪いのかもしれない。」「自分がDVの原因だと思う。罪悪感やDVを止められない無力感を感じる」「自己評価が低くなる」「楽しい時がいつ壊れるかわからない。不安で、不安で遊園地に行っても楽しめない。」「常に緊張を強いられ安全感、安心感が育たない。」「他者が信頼できない。」逃げるんです。「空想の世界へ投影する」、これ子供の特権ですよ、遊ぶのが仕事ですから。内心が揺れていく、パートナーシップをこんなふうにして学んでしまう。面前DVというにはちょっと薄い感じがしますので、子供のこころの発達ですよ。最終的には自分も暴力を振るってしまうかもしれないという恐怖、こうしたことが大きなテーマとしてある。

三つ目ですけど、これはマジョリティの問題に最終的に行きつきます。ですから人権の啓発ということになっています。マジョリティの無知とマイクロアグレッションの指摘によって、マジョリティがどういうふうは無知として表現されてくるか、これはよく引用をされます。マジョリティは自動ドアに入るように、みずから何かを努力してハードルを超えなくてもいいというマジョリティ問題がある。マイノリティの場合はいろんなハードル、差別という大きなハードルがあるので、努力を強いられることになる。このマジョリティ問題をどう扱うかっていうことになります。幾つか日本の中で置き換えながら、スーさんの書物に学んで、翻訳者たちと一緒に議論しながらついてきた。

資料の、このLINEメールはダミーです。私がこんなこと言ったわけではありませんが、学生たちから相談があった。ある女子学生が相談にきました。「俺がとっている3限目の講義が休校になったので会いたいと恋人からメールが入った。」これについて相談に来たんですね。とても大事な相談だったのでここを深掘りして、そこに論文を書きました。論文はフリーですから、ダウンロードしてみてください。この発言が持って

いる性質、もちろん女子学生はNOと返したんですね、NOと返したんだけど、後味が悪い心理状態になったので、気持ちを整理したくて、私が社会病理学、いろんな暴力の話をしていますから、この先生なら話ができると思ったんでしょう、話をしに来てくれました。とてもよい問題意識をお持ちだったので、あなたの考え方はこんなふうに整理できるのではないかという形で一緒に彼女と対話したことをそこに書きました。たった1行の中に含まれている10個ぐらいの暴力性を持つ論点をそこで浮かび上がらせたんです。彼女はこんなこと言わないし、彼だけが一方的に言う。そして悩むのも彼女、ここには明らかに関係の非対称性があります。何よりもNOと言ったので、次に彼にきちんと会えるだろうかという不安が一方です。これデートバイオレンスですよ。そして何よりも、自分の都合だけで彼女の時間を奪っていったりする。たった一行のメールにいろいろなことが込められていると、本当にマイクロな一行の中にいろいろなテーマがあるということで、彼女と話をすることができたのです。これは7年前のメールです。そんなに最近のことだけじゃないということです。つまり関係がものすごく非対称な中に権力勾配が入り込んできて、悩み方それ自身、悩み方というのは心理臨床のテーマですので、悩み方それ自身がマイクロに組織されていてアグレッシブな中に、アグレッションがあるから、自分がこれは前から言っていることです。

肌色は特定できないのに特定してしまっているのが日本の現実です。クレヨンに肌色と書いてあります。これはある外資系の会社のバンドエイドです。肌色タイプと書いてあります。キャミソールの袋にも、ちょっと見にくいですが赤いところに肌色と書いてあります。これは商品撤回になりましたし、店頭から回収されました。ですからバンドエイドも本当は皮膚の色に合わせてたくさん用意しなければならない。しかもそれを肌色と特定できません。ナチュラルカラー、スキンカラー、ベージュなのに、何でこれが肌色なのだろうか。肌の色はあるのだけれど、ないわけですね。こんな形でレイシズムの自覚をすべきではないかと考えたのが、楽天のオコエ瑠偉選手の発言でした。これはブラックライブズマターが、コロナの時代に大変大きくなって、今はこの選手はジャイアンツに移っていますけれど、お父様がナイジェリアの方で、これも「保育園の時の話、ある日、親の似顔絵を書く時があった。先生は言った。親の顔を肌色で塗りましょう。」その時保育園にあった肌色のクレヨンはさっき言った肌色なんですね。その時当然ですけれど「親の顔を茶色のクレヨンで塗った。そしたら差別やいじめやいろんなことが起こってきた。」こんなことです。こんなことは日本社会の中ですでにたくさん存在していますよね。あるいは黒人の胎児を描いた医学書。医学の領域でも一番下の赤いところ。医学の世界に平然と存在していて私たちが気づいてないかもしれない偏見の一部を明るみに出したのが、黒人たちの体の色ですね。医学イラスト、医学教育にどのように多様性を持ち込むかということが大きなテーマになって、こういうのが話題になった、最近ですよ、2020年の話です。

一橋大学院生アウトティング事件、あいつゲイだってとアウトティングが大変大きなテ

一マになって、アウトイングされたゲイの男子学生は自殺をしてしまいます。その後、裁判になって争ってるわけですね。アウトイング、暴露という、これがその後学生たち、一橋大学の学生たちが頑張ってるわけですね、何をすべきなのかってことですね、当事者からの相談があって、Aさん、Bさん、Cさんの関係性があるアウトイングされた時に、相談してしまいました。相談という一見ポジティブに見える中に、問題が表れていますよね。アウトイング、知っていないということですよ。自分の悩みを相談したように見えるけども、それは社会的には、ハラスメントになっていく。ですから否定しない、責めない、言わないという、こうしたことを学生たちに周囲が訓練しなきゃならない。

根強い能力主義という問題もあります。わいせつ事件において、ジェンダー意識がそこに反映されますよね。この事件の相手が東大生だったことで、訴えた被害女性が勘違い女だろうとネットで騒がれました。激しい二次被害でした。能力に基づく異なる取り扱い、合理的な差別で、区別でいいと、こんなふうに思ってしまう。

若者たちが考えるマイクロアグレッションは、タブロイド版で取り上げられたんですね。社会病理では、こんなことをずっとやっています、マイクロアグレッションを身近な体験から、探し出そうということで、こんなことをやりました。フォトボイスというのをを使いまして、YouTubeとか動画世代なので、それと反対で、静止画像、一番自分が社会病理だと考える1枚、2枚の写真で、何でもいいですけど、そこにボイスを入れましょう。ちょうどこの学年はコロナで何もできなかった時だったので、みんなの声をいつまでもネットに上げながら、聞き合おうという、寂しさを紛らわすこともかねてフォトボイスの手法をとりました。

この男子学生はこの2枚の写真を上げてきました。テーマは日傘の男。何が日傘の男かというと、皮膚が弱くて、これ新聞の記事ですけど、皮膚が弱くて小さい頃からスキンケアには相当に留意してきた。紫外線も良くない、髭剃りも負ける。無駄毛処理もしてきたし、夏は日傘を差すようにしてる。皮膚にも気を使いながら乾燥しないようにして、皮膚の病気にならないように気をつけた生活をしている、幼いときから女子力半端ないねと言われた。褒め言葉だったのか揶揄なのかわからない表現をされてきた。とてもいいマイクロアグレッションの指摘だったと思います。女子力というジェンダーバイアスのかかった言葉ではなく、自身の必要性があってやっているセルフケアですね、スキンケアですよ。そんな息子の姿を見て一番彼に怒りをぶつけたのが父親だったらしいです、50歳の。しかし、また一つのオチがあります。彼は、ジェンダーの話をすればそうなんですけども、男性性の問題という形で考えると、一番コンフリクトは親子の中にあった。父子関係の中にあったが、彼は、それはもう筋骨隆々としたマッチョな人間です。日傘をさす男フォトボイスを作ってから卒業研究にまでこれを持っていくのです。「僕は爪が割れやすくて肌も荒れやすいんで、日焼けやカミソリのダメージも下げたかった。だから脱毛したり日焼け止めの日傘を使ったり保湿したり、でもケアという感覚で自然に始めたことが想像以上に、批判や衝突を生むことを経験しました」

と書いてくれました。これも良い卒業論文になりました。こんな形でマイクロアグレッションを体験して一番大きな葛藤が出たのが、50歳の父親との葛藤だったんですね。大きなテーマをそこに含んだ、日常的な父子のやりとり。ここに孕まれているマイクロアグレッションを選んでくれました。

それで、今年はさらにこうしたことは、日常的にもう少しやっけていまして、暴力の加害、大学の中で言及しているというだけじゃなくて、冒頭ご紹介しました実践の中で、これを取り組んでいます。大阪全域で男親塾をやっています。これは児童相談所によって虐待親として指定された人たちは、子供をケアしていますけども、父親の自分の暴力性をどう自覚するかということは、先ほどのパートナーシップや複合暴力の中にありますので、このことを解決するためのプログラムを作って取り組んでいます。さらに京都府と一緒にやっていますのですけれどもDVグループワークをやっています。加害男性相談です。ストラクチャはそこにそれぞれ書いたように、やっています。年中やっています。京都府のは結構人数増えてきまして個人相談とグループ、今三つ動かしています。暴力に焦点が当たっています。当面、児童虐待の場合は親子分離されていますので、母にのみ、母に向かう暴力のリスクをどうするかということをやっています。それから、DVグループワークの場合は一旦離婚調停というだけではなく、自主的に別居していくこととなりますので、その別居期間中に1人でできないことをみんなで出す、暴力グループワークとしてやっています。暴力もドミナント（支配）のストーリー、加害のナラティブ（語り）って相当難しいんですよ。既存のストーリーがかなり入り込んできます。資料に列記したようなことを平気で語ります。これを修正していく、対話的、ナラティブを大事にしています。

どんなプログラムをすればいいのか。今日本では、こういう脱暴力プログラムに参加しなさいという、受講命令と呼んでいますけれども、受講命令がないです。私が内閣府でいろいろ委員でしたり座長でしたりさせてもらっているのですが、プログラムを作ることはできますが、その参加命令制度を作るということについて、国はとても慎重です。対立しています。もちろん、どのようにすべきかというのは建設的に提案しているのですが、

さらにマイクロアグレッションや心身の暴力、心理的暴力への関心が向かっているので、これは被害者支援からそうなんです。被害者支援の論理と加害者対策の論理が整合しない。あるいはマイクロアグレッションを含んだような関心事項が多様に出てきています。それに対して加害者対策のロジックツリーが合っていないです。これは性犯罪もそうでしょうし、虐待もそうです。ですから被害の救済、被害から脱出、被害者の自立支援という大きな流れとともに、ほとんどないのです。しかし、グレーな領域として放置されているので、ここに対して社会啓発が、今どのように、人権も含めて、脱暴力に向かうかということに関心があって、ここでの加害のナラティブは大変大事と思っています。特に愛情でもあるし、友情でもあるというこの言い方がまかり通って

います。コミュニケーションだと思っています。お前のためである。これは駄だ。これは他罰的で、男性性がとても強く、不活性化されています。ナラティブが出てくるのを、ドミナントのストーリーと置いて、そことの対話です。これは社会が持っている加害男性たちが自主的に開発した形じゃなくて、中国から来ている留学生が教えてくれました。モラルハラスメントっていう、フランスのマリー＝フランス・イルゴイエンヌさんの書物ですね。中国語でも訳されていて、冷暴力と訳されるんです。大変リアルな言葉です。そこに書いてあることがほとんど全部です。そういうことを日本のモラルハラスメントを行うDV、虐待、それから体罰をする教師、ハラスメントをする上司等は、ここに書かれている言葉とかなり重なるものを使います。冷暴力。「自分の物を買うときにいつも一緒についてくる。僕の好みの女性になってほしいと言う、自分が自分になくなっていく感じがする。」というふうに語ってくれた、DVの被害女性がいました。「交通の便が良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに免許を取らせてくれない。運転が下手だからと言う。だからいつも彼の車で行動することになる。」愛情のようだけど愛情でない、束縛ですよ。いろいろあります。五つ目、「DVを受けてるのに彼という方が安全だと思うような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着くからといって、これは、電子的追跡としてストーキングだったり、電子的追跡も駄目だという事に最近法令ではなってきたのですが、これはちょっと前の事例です。

サイエンティフィックにもいろんなデータが諸外国では出されています。コントロール、THE PSYCHOLOGICAL MALTREATMENT OF WOMEN と書かれているアセスメント、そこに列記したようなことが、膨大な加害者たちの調査をしながら、分かってきています。私の友人に嫉妬したり、自分の友人に嫉妬したり疑ったりする。他の家族との関連に口出しをする、実家との関係とかですね。私が自立するのを邪魔しようとしたというのはこういう行動が見られると、高リスクというふうに判定される。ですので、全体としてこういう一つの関係で見ると、加害男性たちが持っている認識の中に言葉がない。自分を語る言葉がなくて、ようやくモラルハラスメントという言葉は一部浸透してきました。しかし、ますますこのずれが激しくなる今後ですね、責任の召喚、マイクロアカウンタビリティと名付け、位置付けた言葉をグループワークで使っていくことになります。私たちが大阪や京都でやっているのはゼミナール方式の脱暴力グループワークで、ジェンダーという言葉さえ知らない人たちです。家父長制的人生でしたよねとか、その言葉をどこから使ってきたのかなどを話します。

資料の例で、「恋人同士だったころ、ドライブをしていたら小動物を轢いたような衝撃があり、助手席にいた彼女が車を止めて確認したいと言った。彼は無視して走り続けた。車の点検をしたり、もし何かの動物が死んでいたら保健所に連絡したり、道の路肩に寄せて、いろんなことをしなければならなかった。このときの違和感がいつまで

も残った。そんなのもういいよと言って、放置して走り去った彼と、将来結婚して子供ができたら大丈夫なんだろうかと、その時ふとよぎったと言います。命の感受性の異なりと彼女は表現していました。」ずれなんですね。こうしたことで、例えば発達障害。「多動だとかのお子さんを育てている母親、妻から見れば分かるが、父親が障害を認めたくない。障害かどうかは問題であるのではなくて、夫が取り合ってくれない。子供の行動の特性を案じる妻がいて、そのことを理解してほしいと思うだけなのに、そんなことやらなくていいよといきなり決めつける。」あるいはそんなものはほっといたらという形で、小動物を轢いた後も走り去ってしまう。

ここら辺の資料はちょっと飛ばしていきます。ですから事件として身体的暴力が起こる。その事件として、それが氷山の頂点のようにあるだけじゃなくて、その背景になっている「地と図」の関係で言えば、最終的にまとめとして、良き隣人モデルということをご提案しています。加害者、被害者というのは、軸になっていくわけですが、友人、同僚、隣人、親族としてコミュニティにおける脱マイクロアグレッションをどう考えるかということを考えています。マイクロアグレッションをテーマにすればするほど、とても日常的で直接的で、分かりやすい人間関係の中にテーマが入ってきます。ここからどのように、テーマ化していくかが加害者、被害者という軸は大変先鋭的なのですが、傍観者、同調者にもならないようにするための教育の必要性を考えています。これの背景は、DV、虐待、ストーキング、いじめなど、構造的にはいろいろな整備がされていきます。これからも進むと思いますが、残念なことですが公の相談には行かないのです。ハードルが高いです。相談してないのです。相談してない中に、どうやって啓発するかっていうのはあるのですけれども、まず誰にも相談しない人たちが一番多いのですが、次に相談に行くとしたら、友人、知人、家族が多いです。ですから、この友人、知人、家族がどのような存在であるかということが、大変大きな市民社会や地域社会の脱暴力へのセンシティブリティを高めていくはずで、これを善き隣人の存在として表現してあります。ここに対して、アウトティングなんかもってのほかですが、マイクロアファーマーションという概念とか、マイクロアカウンタビリティ、英語でしかなくて今なかなか良い翻訳はないんですが、スー先生たちのマイクロアグレッションの告発的な書物として、それに対してどうしたらいいのかについて、2冊目、3冊目の本を書いているんです。アグレッションを前提にした人権教育の体系化の素材を出したいなと思っています。脱傍観者教育です。根拠は、友人、知人、隣人として相談されるということですね。中には日本の場合はDV虐待の場合、親族も入っています。これは、そこに書いた本がその2冊目の本です。『差別への日常的介入法～個人的・組織的レイシズムと偏見に対して私たちができること』に記されていますが、アメリカですからレイシズムが大変大きな存在を持っていますけれども、日本の場合はさらにもう少し広く、対応したいなと思っています。マイクロアグレッションを把握する意義は、被害や加害の医療化、病理化、トラウマ的体験なので心理臨床化する傾向が強い

ですけれど、これだけではなくて、私はむしろ、社会のシステムや関係性や社会の病理が問題なので、人権論や社会科学もそこに追記されないと駄目だと思っております。しかし、対人関係の働きかけなので、教育的なアプローチがどうしても必要になります。ですので、傷ついた者へのパーソナルセラピーと社会が加害性を自覚していかない限り、被害が語れないのです。これは今のジャニーズ問題の男性の性被害が典型的です。被害の窓口、相談の窓口だけを開けばいいというのは、大きな問題点を孕んでいるということになる。ですから社会が加害を語る言葉、認識的不整備と呼んでいます。あるいはそのことが抑圧的に作用する。つまり、内省を深める形で、お前も悪いという形で、自省的、内省的に自己非難を強いるようなトラウマ的体験を病理化しないという、新しい議論を、是非このマイクロアグレッションをどうするかという議論とともに紹介したいと思っています。

まとめというと心のケアだけを突出させないこと、社会の説明責任や加害性・暴力性の認知が先行すべきこと、そして地域社会、市民社会の中で善き隣人モデルを工夫していかなければならないこと。これは最初に言いましたように、ピアースさんが精神科医としてこの問題に気が付いた。多文化臨床をすればするほど、多文化の中での抑圧性に気付いていかなければならないと感じたからこそ、マイクロアグレッションという言葉が体系化されてきたということになるわけです。ですので、こういうテーマを日本社会も大変大きく持っているはずなので、可視化していきたいと思っています。いくつか今のようなことを述べたものがありますので、これは 600 ページぐらい無料で読めますので、また是非参考にしてみてください。私の話はちょうどここで終わります。

○炭谷座長

中村先生ありがとうございました。本当に膨大な内容で、私ども、私自身も初めてお聞きするような内容がたくさんあります。非常に膨大な内容を要領よく、限られた時間の中でご説明いただきまして、ありがとうございます。それでは時間が限られておりますけれども、ご質問があればよろしくお願ひいたします。

○小向委員

それではよろしいでしょうか。中央大学の小向と申します。中村先生、今日はもう大変重要なお話をありがとうございました。お伺いしてですね、加害者側のケアと言っていいんですかね、男親塾のような取り組みっていうのはすごく難しいけれど重要だというのが伝わってくるお話だったと思いますし、いろいろとこの取り組み方法とか、これからもこう積み上げてとか発展させていくという取り組みをされてるのだと思うのですが、これというのは来つづけさせることがかなり難しい。法的なエンハンスメントがないということもご指摘されてたと思うんですけども、これを続けること自体がかなり難しいのではないかという感じを受けたのですが、その辺りとい

うのは中村先生はどのようにお考えになってるのかお伺いしてもよろしいでしょうか。

○中村教授

ご質問ありがとうございます。正確に聞いていただいたところもあり、感謝いたします。おっしゃる通りで、男親塾は大阪市、大阪府堺市の児童相談所でやっているのが大阪全域なんですね。子供が保護されているというのが大変大きな事情なんですね。それでこの父性とか父親とか、あんまり父性とか強調しなくてもいいのですけれど、ペアレントフッドでいいのですけれども、一旦ジェンダー化された意識を大変色濃く持っているんで、一応あなたは父性についてどう責任を持つのかという言い方をします。最終的にはジェンダーレスになってきていければいいんですが、いきなりいかないんですね。

それで父親の責任ということで子育てもしてないのに、なぜ虐待するのかということをお聞きします。そうすると、経済的責任とか家長としての責任とかという言い方ではないのですが、実質上はそういうメッセージが出てきます。これに対して対象化、働きかけの対象にしつつ最終的な心理力動は、子供とやり直したいんですかというメッセージなんです。子供とやり直したいのであれば、何かあなたもアクションすべきでしょうということになると、それから幸か不幸か、不幸なことなんですけれども事件がたくさん起こりますので、このことと照らして、あなたも同じ虐待親ですねという言い方をすると、そうじゃないということでは何か動き出す面がある。これを大きな力動の手がかりにしています。ただアセスメントをしつつでないと、幸い、逆な場合はケースワーカーがいますので、児童相談所のケースワーカーが担当していますので、アセスメントをしつつ、それから母親面接をしていますので、母親からの家族の事情聴取、これは事情聴取というと警察的ですけど、ケースワーカー、ソーシャルワーカーとしてヒアリングしていくことになります。ですから多軸多面的に、それから動機形成の力動ですね、ここを多少工夫しつつやっている。

それからDVの場合は、もっと違って、児童福祉のスキームに乗ってこないんで、動力性がとても強いのですけれども、今度は階層性が高いのですね、階級階層性という軸が出てきていて、それで社長さんとか弁護士とか教授とか、いろんな人たちがやってきます。少なくとも生活保護世帯はやってきません。児童虐待の場合は生活保護世帯が存在しています。となると階級階層の選外と反映されてきて、階級階層性に依拠したコミュニケーション的な変化を、さっきの動機づけのところに工夫しています。

今日は時間がないので申し訳ないのですが、それは相当、工夫ができるのですけれども、こうしたことができる層は一握りだと思います。ですから、加害者達の全体ではないのは分かっています。それでも働きかけてやっていて変化の可能性を、プログラムなり、臨床技法なりとして体系化することはできるかと思っていますので、一旦可能性のある人たちに対してやっています。そもそもそういうところに来るっていう段階で、何

か動機づけが一定あるはずなのですね。ですから先生ご指摘のようなことは、ワンサイズフィットオールっていうのがありまして、一つのサイズですべての加害者にフィットさせるのは無理だというのが、この加害者臨床の原則なので、ワンサイズフィットオールではない形で、オールに対してはオールという、ただオールは全部用意できないので、幾つかの類型化をしつつあるっていう。そんなことをご理解いただければと思います。

○小向委員

どうもありがとうございます。大変難しいというんだということも含めてよく分かりました。

○炭谷座長

それでは他に何かございませんでしょうか。

○阿部委員

はい。ありがとうございます。大変盛りだくさんの中身で、是非このレジュメにつきましては、先生の了解を得たら各自必要な人たちにはメールで送っていただくということは可能でしょうか。もう二、三回読み返さないそうですね、頭の中が整理できないのかなと思っておりますので。

○中村教授

どうぞ、私は構いません。

○事務局

阿部委員ありがとうございます。質問のご確認なのですが、おそらく今日、Webの方でご参加いただいた委員には、電子データで今日の中村先生のレジュメが渡っているかと思います。

○阿部委員

この後確認しまして届いていなかったら連絡を入れるようにします。

○中村教授

それで私は別に構わないのですが、幾つか私が取り組んでる事例の発言、青を入れてありますので、その部分は委員限りとしていただくとありがたいです。（※資料44ページは委員限り）

○阿部委員

分かりました。ありがとうございました。

○炭谷座長

ほかに他にありませんでしょうか。

○澤田委員

とても勉強になりました。先生がいろいろな方と懇談されたりとか、いろいろ話し合いをされている、そういう体験に基づくお話だったと思います。わたしもたまたま聞いたり、被害を受けた方から相談されたりするのですが、善き友人としてはどうしたらよいのか。中野教授が指摘されたように、どんなふうに対応したらいいのか、新しい理論ということで最後に紹介いただきましたけれど、これについては、社会的にどんなふう、そのシステムが作られていけば、そういう問題についての改善や再犯を防げると思っていますか。

○中村教授

あと何時間かほしいという感じなんですけれど。もともと詰め込みだと分かった上で、マイクロアグレッションという、ちょっと新しい概念なので、そのことが持つ広がりとか深まりとか、可能性とか、一定批判も出てきているので、これを乗り越える次のステージへという、ちょっと欲張った内容になっています。

それから、さらに情報として、内閣府の男女共同参画審議会の下に女性に対する暴力に関する専門調査会というのがあり、その委員もして、政策制度提案や調査研究もそこでしています。その中の第 122 回会議というのがありまして、そこに私が意見を体系的に述べております。それは公表されておりますので、内閣府のホームページからご覧ください。また別の資料がそこに上がっています。その資料で是非見てほしいのが、公衆衛生モデルなのですけれど、ゼロ次予防、一次予防、二次予防、三次予防と 4 層構造を提案してあります。それゼロ次予防ってのは善き隣人モデルのことです。三次予防というのは刑務所内でのことです。もうかなり進んだしまった人たちの暴力ということです。その一次、二次の間に、この地域社会や市民社会が入り込んだり、皆さん方のような NPO や意識的な取り組みが入ってきたりします。

それと加害相談など、もう少し相談体制を民間レベルで自由にできないかということだったり、暴力という言い方でなく相談ができると、こういう言い方もしながら提案をしてあります。第 122 回のその会議の議事録や、そこにあげられている中村委員資料と検索してもらえますと出ています。そういう取り組みをしているということです。

マイクロアグレッションは現状の指摘ですけれど、途中申しましたように、どうすれ

ばいいのかということについて、たくさんのお話をそこで体系化して紹介もしています。それから最後に紹介した、それらを支える差別や暴力や大きな社会問題を背景にして、対人関係の中に現れてくるという局面を押しえようとしているのがマイクロアグレッションです。ですから、脱マイクロアグレッションなんですね。そこが日常的には大事です。もちろん政策的には国際社会の政策やいろんなことが必要なので、マクロな層とマイクロな層が、その議論の新しいのは、また今紹介した最後のキーワードで検索してもらいますと、翻訳書が出ましたので最後の新しい理論として紹介したパワーと、それからミーニング、フレームワークと、検索してもらいますと出てまいりますので、それをお読みいただくのが一番早いかと思います。ちょっと今日は時間がないので、概念の紹介ということにさせていただきます。以上です。

○炭谷座長

澤田先生よろしゅうございますか。是非 122 回の審議会の報告書か議事録を読んでもいただければと思います。

○Trang 委員

私は、ベトナム出身で今、神奈川の外国人相談窓口の相談員として活動しております。アグレッションというカタカナをいろいろ調べて理解できました。先生の講演の中の事例は心に響きました。なぜなら、自分自身も、これがあった、これもあった、相談窓口も現時点でもあったというのがいっぱいありました。日本は働けばいっぱいお金が儲かるから、国に帰れば金持ちになるのでしょうか。この国が合わなければ、国に帰ればとか。あなたたち文化的には、それは、あくまでもあなたたちの国の中では通じるけど、この日本社会では違うのよということに対して、我慢していたんです。今、聞いていると、一つの差別というか、全部がこれで説明できるので、もっともっとひろげていただきたいと思います。

○炭谷座長

大変内容の濃いご説明でございまして、中村先生のたくさんのご著書は、ホームページ、ネットでも情報が得られるようでございますので、私どもも勉強をさらに積み重ねていきたいと思っております。本日は本当に中村先生ありがとうございました。これからの我々の検討に大変役に立つご報告であったと思います。ここで中村先生は退席されます。貴重なご講演本当にありがとうございました。

それでは次の議題である令和 4 年度のかながわ人権施策推進指針取組状況報告について事務局からご説明をお願いいたします。それでは石井担当課長お願いいたします。

○事務局から資料 2 について説明

○炭谷座長

それではただいまの説明について、時間も限られておりますけれども、ご質問があればお願いをいたします。ネットでご参加の委員の方もお願いいたします。

○檜垣委員

1点確認なのですが51ページのインターネット上の誹謗中傷の書き込みについて法務局に削除依頼ということで、依頼をしたのが86件で、実際にこれ削除されたのが8件ということでよろしいのでしょうか。

○事務局

ご確認ありがとうございます。ご指摘の通りの状況で依頼につきましては86件させていただいておりますけれども、命令ではなく依頼という形になり、その結果、削除自体は掲載をしている各プロバイダの判断となりますので、実際に削除できたということを確認できている件数が、少なくなってしまう状況です。

○炭谷座長

本当ですね。もう1割ぐらいですからね。これは法務局に依頼した件数が86件で、法務局自身は削除要請しているということなのですか。

○事務局

法務局から実際にどれだけの件数が、削除要請されたかというところが、私どもの方では把握ができません。

○炭谷座長

それでは他に何かございませんでしょうか。膨大な資料でございます。またお読みになって、お分かりにならない点がありましたら、事務局の方に直接お聞きいただければと思います。それではちょうど予定した時間が来たようでございます。質疑はこれまでとさせていただきます。今回の懇話会はこれで終了したいと思います。皆様、審議にご協力いただきまして、ありがとうございます。最後に事務局から連絡事項等がございます。

○事務局

本日は委員の皆様、たくさんのご発言をいただき、ありがとうございました。また長時間にわたる会議、お疲れ様でございました。次回の懇話会は来年の1月頃を予定しております。別途日程の調整をご連絡させていただきますので、よろしくお願ひいたします。

す。

(閉会)

<資料>

- ・ 第 16 期かながわ人権政策推進懇話会 委員名簿
- ・ 講演資料 「マイクロアグレッションについて考える」
- ・ 報告資料 令和4年度 かながわ人権施策推進指針 取組状況報告